
流星のロックマン～光輝く絆～

ペガサス・キングダム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン〜光輝く絆〜

【Nコード】

N1142BA

【作者名】

ペガサス・キングダム

【あらすじ】

メテオGの脅威が去ってから数ヶ月後、冬休みも明けて学校も活気に満ちた。

だが、物語は急展開を迎える。黒い幕の先に人々は何を見るのか？

プロローグ(前書き)

どうも！作者です！

初投稿なので文章力乙ですが

未永くよろし『うつせえ！さつさとはじめる！』

．．．．．へい．．．．．

(ウォーロックめ．．．いつかこの恨み．．．)

ブローグ

くブローグく

「ひいつ！た・助けてくれえ！」

『うつせーんだよ！守り神だかなんだか知らねえが消えな！』

『まあまあ落ち着きなつて。』

その電波体はそう言うとおもむろに槍を取り出した。

『喰らえ！』

『うつうあああああああ！！！！』

『あゝあまた殺っちゃったの？』

『ボスに怒られるよ？』

『へッ！いいんだよ人間の一人や二人』

そう言うつてその電波体達はその場から去っていった。

……その場に「DN」と書かれたカードを残して。

~~~~~

場所は変わり、ここはコダマタウン。



『仕方ねえな。「ありがと!」ケツ!貸しだぜ!』

「トランスコード!シューティングスター・ロックマン!」

『ちなみに、貸しだぜ!』

「・・・わかった・・・」

## プロローグ（後書き）

『ポロロン 早くわたしたちを出しなさい。』あれ、さっきも同じことだった気がするわね』

「そつだよ！はやくスバル君に告○したいのに〜！」あれ？さっき同じことだった気がする」

ギクツばれてんのか？

作者がふがいないばかりに  
短編にしちゃって作り直したこと・・・

『へえ〜そんなトリックがあつたのね』

え・・・？あ、いやこれには深い理由ワケがありまして・・・

「うるさい！次話いく！」

ミ・・・ミソラちゃんコワイよお〜

というわけで前作読んだ人は大変申し訳ありませんでした。  
ほんとに次話どうぞ

## 第1話 3人の転校生（前書き）

どうも！作『うつせえ！出番よこせ！』 ちょWWWウオーロックWWW  
前書きぐらいやらせ『ビーストスイング』 うつわあぶね！  
もういいや出番減らすから。

『すいませんでした！……！！……！！』

それでよろしい！

では本編スタート！

## 第1話 3人の転校生

「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！」

『ちなみに、貸しませ！』

「・・・わかった・・・」

(ん？この周波数は・・・！？いや、あいつらは消去(デリート)したはず・・・俺の勘違いだといいいんだが。)

「あ！あれは！」

『どうしたスバル？ 敵か？』

「あ、いや家の入り口見てみて？」

そこには大量のマスコミがいた。

『お前も大変だな』

そうつぶやいて2人は学校へと向かった

~~~~~

「ぎりぎりセ〜ッフー！」

「ぎりぎりセ〜ッフー！」 『じゃないわよー！』

「？」

「あなたのせいで私たちまでチコクしそうになったじゃない」

この人は白金ルナ。クラスの委員長を務めている。

しかしみんな本名でよばない。委員長と呼んでいる。

「そうですよ！スバル君！ぼくらまで委員長の説教に付き合わされるんですよ！」

こいつは最小院キザマロ。頭がよくて、その頭脳は高校生に負けず劣らずだけど、

背が低いのを気にしている。

「そうだぞ！スバル！だから牛井奢れ！」

この人は牛島ゴン太腕っぷしが強くて

たよりになる。でも頭が悪い。

みんな個性が歩けどみんな大切な親友だ。^{フレーザー}

「そんなことより今日は転校生が3人も来るらしいですよ！」

「そうね・・・右も左もわからない転校生に色々教えるのも

チームルナルナ団の使命よ！」

正直そこまでしなくていいとおもっ。

するとそこで先生が入ってきた。

「みんな～席につけ～」

第1話 3人の転校生（後書き）

目指せ！1日5話投稿！！

てなわけで仮眠を・・・ZZZZ

第2話 屋上での出来事①（前書き）

今書きだめしいていますが、長期にわたって連載できない可能性が
あるのであしからず。
では本編をどうぞ！

第2話 屋上でのお出来事〜1〜

「みんな〜席につけ〜」

「何故かすでに噂になっていているようだ。が転校生を紹介するぞ〜！」

「みんなよく知ってるから仲良くするように」

「このときみんな頭の上に？マークだった

・・・が次の瞬間クラスが活気に溢れた

「コッココッコッココッココッココッココッココッココッココッココッコ
おおお〜〜！！

「コッコッコッコッココッココッココッココッココッココッココッココッココッココッココッコ
ツカサにジャックじゃねえか！！

「「「「「「

「双葉ツカサです。みんなあらためてよろしく〜！」

「ジャックだ！またよろしくな〜！」

「よお〜し！この調子でもう一人いくぞ〜！」

ガラガラガラ〜

「ベイサイドシティから転向してきた響ミソラです〜！」

「みんなよろしく願います〜！」

その瞬間クラスが凍てついた。

「……………!?……………」
「」

「これから一緒に勉強する3人だみんな仲良くするように！」

「え〜つと3人の席は〜」

そして教室は荒れた。

そして教室の男子「スバル、ツカサ、ジャックを除く」の眼光が鋭く光った。

「せんせ〜い！ミソラちゃん俺のとなりで〜!!」

「いやいや俺のとなりで〜!!」

「いやあんなやつらより俺のとなりで〜!!」

そんななかスバルはツカサとジャックを招いた。

「二人ともこっちおいでよ！」

「うん！」

「おう！」

そしてツカサはスバルの前、
ジャックはとなり「左」に来た

そして爆弾は落とされた。

「私、スバル君の隣がいいです！」

「・・・だ、そうだが星河いいか？」

「ふえ？なにがですか？」

突然の出来事にスバルは腑抜けた声をだしてしまった。

「だから星河、響がとなりでいいか？」

(うつっクラスの視線が痛い・・・)

しかしスバルは勇気を出した

「あ、はい。いいですよ」

そしてミソラちゃんが駆け寄ってきた

「ヨロシクね！スバル君！」

満面の笑顔で言ってきた。

「こちらこそよろしく！ミソラちゃん！」

スバルも笑顔で返した

するとミソラちゃんの顔がほんのり赤くなった気がしたけど気のせいだ

「ふう〜あぶなかつたあ」

スバルは胸をなでおろしていた
そのときミソラはスバルにこういった

「あ、そうそうスバル君」

ミソラがたずねてきた

「何？ミソラちゃん」

「後で屋上に来て、」

「？なんで？」

「いいからいいから」

「うん。わかった」

この話を聞いていた委員長はハツとなった
そして2人についていくことにした

~~~~~

「起立！礼！さようなら！」

「~~~~~」

授業が終わってぼくらは質問攻めだった

「おい！星河！なんでミソラちゃんとブラザーなんだよ！  
2人に接点ないだろ！」

「そついわれるとそうだけどさ」

「別にいいじゃん！！！！そんなのどうだって！！！！！」

なんと口を開いたのはミソラだった  
そして男子達はだまった

「もういこ！スバル君！」

「え？あ、ちよつと！」

半場スバルは引きずられていく形で教室をでていった

## 第2話 屋上での出来事①（後書き）

『勝負だ！作者！』  
なんで？

『俺が勝つたら出番ふやせ！！！』

ああ、そゆことが、

だ・が・断・る

『てめえ！逃げるのか？』

仕方ないなあ

トランスコード！ペンソールサクシャ・ノックマン！！

『おい作者！ノックマンってなんだ！？』

作者と作者のウィザードのイーノックが電波変換したのさ！

『ぬぬぬ・・・』

『（そうだ！これなら・・・）』

『そんな名前で大丈夫か？』

大丈夫だ、問題ない。

『よっしゃああああ！！！！今フラグたてたな！！！！』

・・・・・・もう長いんで次話に持ち越しますね

それでは！『あ、おい！にげるのか？』

### 第3話 屋上での出来事②

「え？あ、ちよつと！」

スバル達が教室を出てからすぐに男子達がおいかけようとしたが委員長が引きとめた

「お止めなさい！」

「どついつもりだよ委員長！！！」

男子が言った

「どついつつもり・・・じゃないでしょ！ あなた達のせいでミノラちゃんはおこったんでしょ？」

「俺達はただ2人の関係について聞いてただけ・・・ってあ！」

「そう。あなた達は人の言いたくない部分まで深入りしすぎたのよ。」

「みんなは知っているか知らないけどミノラちゃんには両親がいないのよ」

男子達は驚きの表情を隠せなかった

「そしてスバル君にも父親がいなかった時、二人は出会ったのよ」

「どこまでいったらわかるかしら？」

「これ以上二人に深入りしないこと、わかったわね？」

そついうと委員長は教室を出て行った

~~~~~

時間は少しさかのぼり屋上

「ねえスバル君？明日ってヒマ？」

「うん暇だよ」

「じゃあさ、ドリームアイランドに新しくできた遊園地行かない？」

「あれ？ あそこって遊園地なんてあつたっけ？」

「ううん、明日からオープンなんだよ」

「へえ〜そうなんだ、じゃあいこっか」

そのタイミングで委員長が追いかけてきた
委員長はばれないように物陰に隠れた

(なによあの二人、さっきあんなこといったけど……やっぱり
くやしいわ)

「それじゃ8:30分にいこっか」

「うん、わかった」

「僕が迎えに行くから」「いやいいよ迎えに来なくて」

スバルは？だった

「え？なんで？」

ミソラがにっこり笑っていった

「内緒だよ」

「そう？ならいいんだけど」

「それじゃ帰ろっか」

「うん！」

「「トランスコード！！！」」

「シューティングスター・ロックマン！」

「ハープ・ノート！」

青色の光とピンク色の光が空に飛んでいった

「……やっぱり……くやしい……」

委員長はそうつぶやいて屋上を後にした



そのころウエーブロードでは

「ハックシユン!!」

二人が同時にくしゃみをしていた。

「あれ？だれかぼくらの噂でもしたのかな？」

「あはは！へんなの！」

「うん、そうだね！」

二人は笑いあっていた

第3話 屋上での出来事〜（後書き）

『もどってきたか、ノックマン』
ん、ああもち

『続きだ!』

無理 お前じゃ相手にならん

『なんだとてめえ!』

うるさい、喰らえノックバスター!!

『グハツ つつ強い』

3分間まってやる。

『お〜いウォーロック〜!』

『お!スバルか! 事情は後で話す!電波変換だ!』

「え?うん、わかった」

「トランスコード!シューティングスター・ロックマン!」

おや?スバル君もきたね

では改めて……

3分間んまってやる

((どこのム〇力大佐ですか(だ)(

ということ次話で〜!

第4話 黒き脚本家と流星の決断（前書き）

次の話でバトルにもってけそうです^^
さあて！がんばります！

第4話 黒き脚本家と流星の決断

「あはは！へんなの！」

「うん、そうだね！」

「ねえミソラちゃん？」

「なに？スバル君？」

「もうすぐ僕の家だけどさ、ミソラちゃんの家ってベイサイドシティイじゃなかった？」

「あれ？聞いてなかった？今日の転校生みんなコダマタウンに引っ越してるんだよ？」

「あれ？そうだったの？初めて聞いたよ」

スバルは心底驚いた表情だった

「じゃあみんなどこにすんでるの？」

「それはね、クインティアさん、ツカサ君、ジャック君がスバル君の家のとなりで、「あっちよっちよ」と まって？」

「なに？スバル君」

「なんでクインティア先生が引っ越してるの？」

「行こう！ ミソラちゃん！」

「うん！」

そして二人はコスモウェーブに向かった

~~~~~

「ソフソフ！ ついに来たなロックマン！ 今こそ復習の時だ！  
！」

その声の主もコスモウェーブへのポインターへ入っていった

~~~~~

そのころスバル達はコスモウェーブ経由でWAXAに向かっていた

『！！！！ スバル！！後ろだ！！！！』

「ん？なにウォーロツ……うあああああ！」

スバルは突然後ろから黒い影に襲われた

「う……ううう」

うめき声をあげながらスバルは立った
そして視線の先には……

「ミソラちゃん！！！」

「……そうミソラが捕らえられていた
ファントム・ブラックによって

「ソフソフッ！さあ復讐劇のはじまりだ！」

「ミソラちゃんを放せ！ミソラちゃんは関係ないだろ！？」

「ソフソフ！ 残念だが彼女はこの舞台の悲劇のヒロインなのだよ・
・ソフソフ！！！」

「ファントム……お前！！！」

「動くな！！！！！」

「！！！！！」

スバルは突然のことに動きをとめた

「動けばこいつの命はないぞ！」

「くっ……」

「さあエースPGMとジョーカーPGMを渡せえ！！！」

「……」

「さあどうした？ さもなくばこいつの命はないぞ！？」

「スバル君！私はいいいからにげて！！！」

-そして、流星は決断をくだした-

第4話 黒き脚本家と流星の決断（後書き）

時間だ、答えを聞こう！

「ファイナライズ！！！」

「ブラックエース！！！」

バ・・・バカな・・・なぜ・・・

「なぜって、それはね」

「あとがきだからなんでもありなんだよ。」

なんでもあり・・・そうだ！

スバル君

ここにはここで起きた記憶を消すボタンがあるんだよ

「ふえ？」

いくよ！

それっ

ポチッ

ではまた次話で

「うつつ 僕はいつたい」

第5話 トリップルトライブ(前書き)

正直にいます。

めっちゃ強引です！

それではござぞぞ！

第5話 トリップルドライブ

「スバル君！私はいいからにげて！！！」

・そして、流星は決断をくだした・

「……………わかった……………」

スバルはエースPGMとジョーカーPGMを投げた

~~~~~

そのころWAXAでは

「ヨイリー博士！！！」

「なんですか！！この忙しいときに……………」

「それが……………開発中の議事メテオサーバーに、何者が、がアク  
セスしました！」

「ロックマンじゃなくて？」

「……………はい、おそらくファントム・ブラックと思われます」

「わかったわ、今はそれよりスバルちゃん達に来てもらわなきゃ……………  
いい？」

「わかりました」

~~~~~

再びコスモウエーブ

『おい、スバル!! バアさんから電話だ!』

「わかった! ブラウズ!」

「スバルちゃん! 今すぐ戦闘をやめてWAXAきてちょうだい」

「え?・・・でもハーブノートがつかまったんです!!」

「そう・・・わかったわ、ミソラちゃんを助けしだいWAXAに来て頂戴」

「はいっ!わかりました」

「ロック・・・まだ完成してないけど・・・アレ、できる?」

『さあな、やってみなきゃかんねえ・・・でもやるだろ?』

「うん・・・行くよ!ロック!!」

『おう!いつでもOKだぜ!』

『「トライブPGM起動! トリプルトライブ!!」』

そう叫ぶと同時にロックマンの周りに雷、風、炎が現れ強い光を放

った

「はああああああ！！！！！！」

そして光がだんだん強くなりやがて目もあけられなくなった
その光が晴れるとそこには……

『「トリプルドライブ！ トライブキング！！」』

「！？なにが起こっているのだ ロックマンお前はまた力を手に入るというのか！？」

「違うよ……これはミソラちゃんを助けたいという想いの……
・絆の力だ！！」

・ピカーアアン……

光が晴れるとそこにはロックマンとハーブノートの姿はなくなただ
フロントムだけが立っていた

「くそおっロックマンめえ！とんだ見掛け倒しか……次こそ必ず
……ンフフフツ！！」

そういうとフロントムは周波数変換でその場から消えた

「……ううん？」

「大丈夫だった？ミソラちゃん」

「うん、大丈夫、ありがと助けてくれて」

「でもスバル君、あの変身は？」

「ああ、トリプルトライブのこと？ あれはねまだ不完全なんだ、まだ見掛け倒しってところだよ」

「ところでさミソラちゃん」

「なに？スバル君」

「／／／お姫様抱っこやめていい？／／／」

「／／／！？／／／」

「／／／ふえ？あ、うんいいよ／／／」

そんな会話を交わしながらWAXAに向かった

第5話 トリップルトライブ（後書き）

・・・なんだろうこのぐだぐだ感・・・

第6話 覚悟と想い（前書き）

あああぐぐだぐだあゝ

とっとなきりあげて日常いっしょ！

本編どうぞぞ！

第6話 覚悟と想い

WAXAに着くと入り口でヨイリー博士が待っていた

「スバルちゃん！ミソラちゃん！詳しい事情はあと！メインコンピ
ユータールームに来て！」

「「はい！」」

~~~~~

そこには元サテラポリス遊撃体のメンバーにクインティアが  
緊張した面持ちで待っていた

「スバルちゃん、ミソラちゃん、時間がないから手短かに話すわね」

「今シドウちゃんをジョーカーちゃんにやられた時みたいに復活さ  
せようとしてるのよ」

「でも今崩壊が始まっている・・・」

「だからあの時みたいにシドウちゃんを呼び続けてほしいの」

「お願いできるかしら」

「「はい！！」」

~~~~~

謎の場所

「ふあゝああ・・・ココどこだろ」

そこには暁シドウがいた

『わかりません・・・計測フノウです』

「マジで？」

『ハイ・・・私でもここがどこだかわかりません』

「そっかあ」

「ふあゝああっ 眠みゝなあ」

・・・シドウ！いけないで！・・・

「な・・・！？ティアの声だ！！」

「いくぞアシッド！電波変換だ！」

『わかりました、シドウ』

「トランスコード001！アシッド・エース！！」

~~~~~

「ヨイリー博士！シドウさんのデータとアシッドのデータが・・・」

「

皆は一瞬駄目だったのかとおもった……だが

「ええ……データが融合していくわ……」

「ヨイリー博士！メインコンピュータールームにトランススコード・アシッド・エースの電波変換の反応があり　ました！」

全員の期待は確信へかわった  
そして懐かしの声が聞こえた

「ウイングブレード!!!!」

「……シドウ?……」

「ティア、大丈夫か？怪我してないか？」

「……え?……」

「あれ？みんななんで泣いてんだ？」

それから事情をシドウに話し……

「そういうことか！」

「みんな心配させてすまなかつた」

そして何故かスバルの家の隣に住むことになった  
そしてその帰り道

ゴン太とも分かれてスバルの家の前に2人は立っていた

「ミソラちゃん家に帰らなくて・・・い、いの？」

だんだんスバルは顔が青ざめていった

「うん！だから帰るね」

「お邪魔します！」

「・・・ただいま・・・」

「あら、お帰り二人とも、」

「スバル君のお母さん遅くなった理由は・・・」

「いいわよもう連絡きてるから」

「ホントですか？ ならよかった」

「ミソラちゃん？ ここは、もうあなたの家なんだから帰ってくる  
ときはただいまっていつのよ？」

「え？・・・」

「それにあなたはもう家族なんだから私のことも『お母さん』でいいのよ？わかった？」

その瞬間ミソラが泣き崩れてしまった

「うっうっ・・・ぐずっ」

すると茜がミノラを抱きしめた

「大丈夫よ、ミノラ」

「うっうっ……ありがとう……お……母さん」

その中で男子組みは……

（『僕ら（俺ら）のこと忘れてない！？』）

第6話 覚悟と想い（後書き）

ついに定番のアレがきますよ〜  
さあてがんばらばきかな！

第7話 ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』（前書き）

さあ今回もぐだぐだ参りましょ  
それでは本編どうぞ！

## 第7話 ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』

「へえ〜スバル君の部屋って宇宙の本ばっかだねえ〜」

「まあそれしか取り柄がねえんだけどな、スバルは」

『ポロロン ちょっとこっちこようね〜ロックちゃん』

『ああ！なんだとハー』なにかいったかしら』いいえ！なんでもありません！』

『じゃあ行きましようか クスクス』

『よろこんでお供させていただきます！』

会話を終わると2人？の宇宙人はどこか行ってしまった

「はあ〜まさかミソラちゃんが家に居候するとは……」

「あれ？私が出るのいやだった？（上目使い+涙目）」

「うつつ嫌じゃないよ（それはずるいよ……ミソラちゃん……）」

「ところでさあ、スバル君、スバル君ってギター弾ける？」

「え？う〜んやってみなきゃわかんないや」

「じゃあはい、やってみてよ」

そういうと自分のギターをスバルに手渡した

「わかった、でもどうやるの？」

というときミソラがスバルのうしろにまわってピッタリ体をくっつけてきた

「＼＼ミ・・・ミソラちゃん！？＼＼」

「ギターを弾くには・・・まずこうやって？」

「え？うんわかった」

ポロロオン・・・

「じゃあ今度は一人でやってみて？」

ポロロオン・・・

「すごいね！ スバル君！ たった一回でそこまでできるのはすごいよー」

「これなら芸能界デビューも夢じゃないよー！」

「いや・・・僕は別にデビューしなくてもいいんだけど・・・」

このとき決まってしまった・・・

ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』

スバルがこの作戦について気付くのはもう少しあとのことである。



第7話 ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』（後書き）

ついにやってきました

王道中の王道！

スバミソ路線ですがヨロシクおねがいます！

第8話 スバル君とお風呂 ㄱ1ㄱ (前書き)

1日がおわらないいゝ

第8話 スバル君とお風呂 ①

「スバル」 ミソラ「ご飯よ」

「はい!!」

あれからスバルはギターを練習し(させられ)  
そこそこ上達したのである

「いただきま〜す!!」

今は大吾は勤務中でスバルとミソラの3人でご飯を食べている  
だが鬼とはいつ何時やってくるかわからないものだ

「ねえねえ2人と、2人も付き合ってるの？」

「／／／!?／／／」

「ゲホツゲホツ・・・か・・・母さんまだ付き合ってるよ」

「そうだよ、お母さん、まだ付き合ってるよ」

「あれ?でも、まだ、なんでしょ?」

「／／／・・・／／／」

「／／／じつ、じつさまー!／／／」

「／／／私もじつさまー!／／／」

「お粗末さま」

「あ、ミソラまって」

「へ？あ、はい」

「部屋、片付けたけど？どうする」

「スバルの部屋に・・・」スバル君の部屋がいいです！」「そう・・・なら荷物もってっちゃいなさい」

「／＼／＼は・・・はい／＼／＼」

「じゃあ布団は1つでいいわね？」

「／＼／＼は・・・はい／＼／＼」

そういつとミソラはいそいで階段を駆け上がった

「ウフフツ 可愛いんだから」

そういつと食器を片付け始めた

~~~~~

「あ！スバル君」

「ん？ 何ミソラちゃん」

「今日一緒に寝よ」

「無理」

即答だった

ミソラはOK出すと思っていたらしいが実際は違った

「え？なんで」

「僕男の子だからね？」

「スバル君そういうことする子じゃないじゃん」

「てかスバル君私のこと嫌いなの？（上目遣い+涙目）」

「うつつ（やばいつ可愛すぎるっ）」

「わ・・・わかったよ」

「2人ともお風呂沸いたわよ」

「それともいつしよに入る？」

「＼＼＼！？＼＼＼」

「＼＼＼い・・・いつしよに入ります！＼＼＼」

「＼＼＼え？ちょミソラちゃん＼＼＼」

「・・・駄目？」

「いよいよ……（じじい）で粘るとまたアレサられるからね……観
念（じじい）」

「んじゃいじじいか」

第9話 スバル君とお風呂 〳〵

「〳〳スバル君・・・こっち見ないでよ〳〳」

「うん、わかった」

「もういい?」

「もういいよ」

「じゃあ僕着替えるからこっちみないでね」

「ウン」

「もういい?スバル君」

「いいよ」

「じゃあ入ろっか」

「・・・うん」

「じゃあ僕先からだあらっつからコツチ見ないでね」

「うんわかった」

~~~~~数分後~~~~~

「じゃあミノラちゃん体あらっつていいよ」



「だって気持ちいいんだもん」

「はあ」

「もうでよつか？」

切り出したのはスバルだ

「そうだね」

そういつてふたりはお風呂からでていった

~~~~~

くスバル家の屋根の上く

『なあハープ……』

『なにガサツ……』

『ミソラってスバルのこと好きなのか……』

『あんた今頃気付いたの？……』

『ああ……たぶんスバルもミソラが好きなんだろうな……』

『そうだといいわね……』

そうやって2人？は他愛もない話をしていた

第9話 スバル君とお風呂 ㄱㄴ (後書き)

10話でおそろくスペシャルストーリーだします! . . . たぶん

第10話 スペシャルストーリーver1 (前書き)

初のバトルシーンです^^けっこうがんばりました。
まあ温かい目で見守ってください。

第10話 スペシャルストーリーver1

それは、今から1週間前の話・・・（小説内）

それはミソラが本格的にスバルを意識し始めたころの話・・・

~~~~~スペシャルエピソード~~~~~

その日はミソラがスバルに

スキーに誘った日で

ミソラもずいぶん張り切っていた

『そんなもんで大丈夫だと思うわ、ミソラ』

「うん、よし！ ありがと、ハーブ」

『それじゃあ行きましょうか？』

「うん！」

「トランスコード！ハーブ・ノート！！」

眩いピンク色の光が部屋全体を覆って、

次の瞬間は部屋に誰もいなかった

『ミソラ、家の戸締りした？』

「うん！バッチリ！」

『それじゃ急ぎましょうか！』

「うん！」

~~~~~  
「そのころスバルの家では

「よし！ご飯も食べたし！服もバッチリ！準備OK！」

『おいスバル！服装はいつもと同じじゃねえか！』

「わかってないなあ！今日のためにシワ伸ばしたりしてたんだよ？」

『な・・・に？ さすがだぜ！ライザー刑事！』

「よしっじゃあ後はミソラちゃんを待つだけだね！」

つとிட்டたそばから次の瞬間

・・・ピカアアン・・・

ピンク色の光が部屋に満ちたとおもったらそこにはミソラがいた。

「・・・ミソラちゃん、不法侵入って知ってる？」

「気にしない 気にしない さ、行く？」

「わかった！」

「トランスコード！！！！」

「シューティングスター・ロックマン！」

「ハープ・ノート！」

「それじゃ、レッツゴー！」

こうしてミソラとスバルの壮絶なスキー旅行が始まった

~~~~~

「うわあヤエバリゾートだ！久しぶりだなあ！」

「あれ？スバル君来たことあるの？」

「うん前にムー大陸の事件の時に委員長達と来たんだ」

「へえ〜そうなんだ！」

「よし！」

「じゃあいこうかスバル君！」

「うん、そうしよっか！」

2人は物陰に隠れて電波変換を解除した

「とりあえず部屋にいこうか」

「チェックインした？」

「あ、まだだった」

「じゃあちよつと済ませてくるからそこでまっけて！」

「うんわかつた〜！」

ミソラはエレベーター付近で待っていた  
なぜならあんまり目立つと正体がばれるからだ

「ちよつと嬢ちゃん着いてきてもらっせ」

「え？あなただ・・・ん！！んんん！！ん・・・」

ミソラはピンク色の服をきたゴリラのような中年のおじさんに捕ま  
ってしまった

そう・・・こいつは五里だ

「寝たか・・・」

ミソラは薬物をかがされ気絶してしまった

そしてエレベーターに引きずり込まれ

「電波変換！」

なんとイエティ・ブリザードに電波変換したのだ

「グハーーーー！！まっけてるぜ！あのクソガキ！」

そういうとイエティは周波数変換でどこかに消えた

~~~~~  
そのころスバルはチェックインを終え、エレベーターの前にきていた。

「……………」

『スバル！あの女の近くにイエティがいやがる！』

「え！？イエティってあのムーの？」

『ああそうだ、とあえ…………クソツどこか行きやがった！！』

「ロツクはハープの電波追えないの？」

『それだ！ スバル！電波変換だ！』

「わかった！」

「トランスコード！シューティングスター・ロツクマン！！」

そしてスバルは公衆の面前で電波変換してしまったのだ
大吾がロツクマンの正体をバラした今、
あたりは一時騒然となっていた。

~~~~~

そのころスキー場頂上付近では  
気絶したミソラとイエティ・ブリザードがいた

そしてリゾートの回線をジャックしてこう伝えた

「グハーーーーー!!! オレ様はイエティ・ブリザードだ！ 今手元にこの小娘をあずかっている！早く 防寒着を着てないから早くしないと凍え死んじゃうだろうなあ！ さあはやく来い！ ロックマン！」

そしてリゾートでは「あの娘響ミソラじゃない？などの噂が流れあたりはパニックに落ちいった

~~~~~

そのころロックマンは頂上にたどりついていた。

「でてこい！イエティ・ブリザード」

「グハーーーーー!!!」

イエティは ドオオン と音を立てながら落下してきた

「ミソラちゃんを返せ！」

「返せって言われてかえす馬鹿がいるかよ！」

「なら・・・力ずくだ！」

「ウエーブバトル！ライド・オン！」

先手を打ったのはロックマンだった

「バトルカード プレデーション！ ブレイクサーベル！」

そう行つてウォーロックアタックを使い一瞬でイエティの後ろに回りこんだ

「はあああああ！！！！」

ガキイイン！！

・・・と鈍い音がしたが・・・

「そ・・・そんな！？」

なんとイエティの背中にはキズ一つついていなかった

「グハーー！！きかねえなガキイ！こんどは・・・こっちだ！」

イエティはいきなり後ろを向いて踏みつけてきた
だがロックマンも負けじと紙一重で攻撃をよけた

「・・・掛かったな！！！」

「・・・なんだって！？」

「ナダレダイコオ！！！」

「う・・・うわあああああああ！！！！！！！」

ロックマンはイエティの放ったナダレダイコによって
ゆきに埋もれた・・・ハズだった

「トライブオン!!」

「なにい!?!」

「オーパーツは海に沈んだハズ……!?!」

「サンダーベルセルク!!」

「一気に決めるよ!!」

「ふざけるなあ! ナダレダイコオオオ!!!!!!!!」

「絆が僕を強くするんだ! くらえ! KFB!!」

キズヲオビヌクバン

「サンダーボルト……ブレイドおお!!!!!!!!」

お互いの必殺技が炸裂した……
だが そこにたっていたのは……

「グハア……グハア……手間かけさせやがって!」

「く……そ!」

たっていたのはイエティだった

しかしそのときスバルの耳にかすかな声が聞こえた……

「ス……バル……君……逃げ……てっ!」

ミソラの声だった

「(ミソラちゃん……ミソラちゃんが耐えているのに僕はなに

「遅くなってごめんね、ミノラちゃん……」

「おそいよ！スバル君」

これがミノラがはじめてスバルを意識したときの出来事である

ストーリー

第10話 スペシャルストーリーver1 (後書き)

バトルシーンの感想ほしいです！

感想、アドバイス、苦情クレームまってまゝす！

第11話 星とギターと不穏な影（前書き）

敵さんがすこしでますよ〜やっとだせるっ〜
では本編でござい！

第11話 星とギターと不穏な影

二人がお風呂から上がるとほぼ同じタイミングで大吾が帰ってきた

「あ、お帰り、父さん」

「あ、お邪魔してます」

「お帰りなさい、大吾さん」

と口々にスバル、ミソラ、茜の順で行った

「お、早速一緒に風呂入ってるのか？」

「／／／う、．．うるさいなあ！ちょっと展望台行ってくる／／／」

「あ、まってよ」

そう言うと二人は展望台へ向かった

「そついえば明日が会見の日でしたっけ？」

「ん、ああ、そうだが．．．」

「きつとスバルが驚くでしょうね、ウフフッ！」

どこかの脚本家のような笑いを浮かべると大吾の分のご飯を出した



「スバル君」

「ミソラちゃん来てたの？」

「うんヒマだからね」

「ねえスバル君」

「何？ミソラちゃん」

「ギターの練習しよっ」

「い！？今星見に来たんだよ！？」

「じゃあ星見ながら」

「集中できないよ！」

「え？嫌なの（上目遣い＋涙目）」

「い・・・嫌じゃないけど（演技ってわかってるんだけどなあ）」

「じゃあやるっか」

「・・・了解・・・」

その後スバルは星を見ることができなかったという

『なあ、ハーブ』

『なによロックちゃん？クスクス』

『いや……俺らつて出番少なえよな』

『裏話しちゃだめよそんなこといったらロックマンのライバルのブ
○イなんて文字そのものが一回も出てな　いのよ』

『……そういやそうだったな』

そんな他愛もなく平和な生活に不穏な影が忍び寄っていた

~~~~~

ここは宇宙のとある場所、  
フリネット  
FM星付近

だが高度なステルス機能によって場所が探知されることはなかった

「さて……もうそろそろだな……」

「はい、ケラス様……」

「もうすぐだ」

「あの実験が成功すれば……」

「まずは小手調べだ」

「クラウ下聖騎士隊を地球に送れ」

「承知しました、ケラス様」

「……蒼き流星……実力はいかなるものか……」

そういつてケラスは後ろの謎の機会に向かった

## 第12話 グリーンシノビ(前書き)

もうそろそろトライブPGM完成させたいと思います^^ノでは  
本編どうぞ！

## 第12話 グリーンシノビ

現在9：30分、明日は出かけるのでもう寝ることになっていた……が

「さ、早く寝よ」

「やっぱり同じ布団なの？」

「約束忘れたの？」

「いや……」

「じゃあ寝よつか」

そして2人は布団に入った……がスバルは極力ベッドの端にいったがそれは意味を成さなかった

「……なんでミソラちゃん抱きつくの!?!?」

「スー……スー」

「はあもういいや僕も寝よ」

だがスバルは決めていた。

明日遊園地で告白する……と

だがミソラも同じことを考えていたのは別の話

~~~~~

『「ここが・・・地球か・・・」』

地球のニホン上空のコスモウェーブ・・・

『ヤロウども!』

『いくぞおお!!--!』

そういつてクラウド聖騎士隊は姿を消した

~~~~~

WAXAニホン支部メインコンピュータールーム

「私も早く完成させなければね・・・」

ヨイリー博士は一人でそうつぶやいた

~~~~~

そしてAM8:30

「「行つてきまゝす!--!」」

「行つてらっしやい!--!」

2人は元気よく家をでた。

・・・がその近くのウェーブロードに数人の人影があつた

『クラウド様！恐らくあの赤い服を着た少年がロックマンだと思われるます！』

『へえ〜あいつかぁ・・・少し様子を見てみよう・・・』

そういつとその場から周波数変換で消えた・・・

~~~~~

スバル達はウェーブライナーに乗り、ドリームアイランドに向かっていた

ミソラが変装し忘れたのでスバル達に対する視線がすごかった中には「あの娘響ミソラじゃない？」などもヒソヒソ聞こえたそしてドリームアイランドに着くとダツシュでウェーブライナーを降りた

『まずは小手調べにこいつらだ・・・行けっ！！』

そう言つと手のひらを前に掲げそこから大量の電波ウィルスが生み出されていった

そしてそれはスバル達が降りたに起きた

「うわぁあ〜ウィルスが実体化してる！！」

どこからか悲鳴があがった

でも世界の英雄は・・・

「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！！」

なんとまたしても公衆の面前で電波変換をした

近くからは「ロックマンだ！」などの安堵の声が広がった

「なんだ！？あのウィルスは！」

そこには地球では見たことがない・・・まして宇宙ですらみたことのないウィルスだった

「ロック！トライブオンならいけるよね？」

『ああ、1分ぐらいならいけるぜ！』

「じゃあ・・・行くよ！！！」

「トライブオン！！グリーンシノビ！！！」

そういうと体を突風が覆い、風が晴れるとそこには、  
ロックマン・グリーンシノビが居た

「行くよ！KF B！！！」  
キスオビヌクバン

「フウマシップウジン！！！」

大量の手裏剣を投げ、周りのウィルスを一掃した

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「ロック・・・なんか・・・体が・・・熱い・・・」

『ああ、俺もだ・・・！？この感じは・・・恐らく近くにオーパーツがあるぞ！！スバル！！』

「え！？ホント？」

『嘘ついてもしかたねえだろ！』

『行くぞスバル！！』

「まって、ミソラちゃんに一声かけてくる」

そしてスバルはミソラの元に降りた

「ミソラちゃん、近くにオーパーツがあるみたいんだけど」

「それで取りに行こうとおもった。」

「だからミソラちゃんも来る？」

「うん！いくいく！ まだオープンまで時間あるしね！」

「じゃあいこつか、トランスコード！ハープノート！！」

「トライブオン！ グリーンシノビ！」

そういうと二人はその場から周波数変換で去っていった

『やはり・・・あの程度のウィルスではだめだったか・・・』

そういうとクラウドもどこかへ消えた

### 第13話 本当のきもち

『やはり……あの程度のウィルスではだめだったか……』

~~~~~

スバル達はゴミ集積場まで来ていた

『このへんにあるはずだぜ!』

「じゃあ皆で手分けしてさがそう!」

「じゃあウィザードオンしたほうがいいね」

「うん!」

「ウィザードオン!」

そういうと2人はウィザードオンしてあたりを詮索し始めた

『セイントランス
聖なる槍!』

「うぐっ!??ぐあああああああ!?!?!」

「スバル君!?!」

「うっ……うっ……ぐ!」

『お前!何者だ!?!』

『俺？俺はねDNの幹部・・・光を司る者だ』

『てかそこの娘可愛いね、お持ち帰りしよっと』

「させるか！」

『・・・無理だね・・・』

そういうと一瞬でハープノートの後ろに回りハープノートを捕らえた

「!?!?!?!早い!?!?!?!」

『早い?違うねお前の覚悟が足りないんだよ』

「覚悟だったら持っている!?!」

『いいやないねそんな偽りの覚悟なんか覚悟のうちに入らねえよ!』

急に真剣な顔つきでいった

「覚悟があったからミソラちゃんを助けようとしたんだ」

『じゃあなんで俺のスピードについてこれなかった』

「!?!?!」

『お前は真実ホントの覚悟が足りなかった・・・今のお前には偽り(ウン)の覚悟のお前じゃ俺には勝てない』

『俺たちは強い信念の下に集まったんだ』

『だが今のお前はなんだ？』

『世界を救った時を思い出してみろ！！』

「（世界を・・・救ったとき・・・）」

「（あの時はただ・・・がむしゃらに皆を助けたかった・・・）」

「（そうだ！今度もがむしゃらに助けるんだ！！！！）」

「（だからたつんだ！！そしてミソラちゃんを・・・！！！！！！）」

「

「助けるんだ！！！！！！！！」

そのとき数あるゴミの中から緑色の光がロックマンに飛んできた

・トライブPGMアップデート・・・ver1カラver2ニア
アップデートシマス・・・50%・・・75%・・・
90%・・・100%・・・アップデート完了・・・

「ロック！何分いける？」

他人から見ればなんのことかわからないがウォーロックにはわかった

「1分強だ！」

「わかった！！」

第14話 告白(前書き)

はあくやっとかップリングまでいけましたあく
では本編どうぞ！


~~~~~

「ここはドリームパークって言うんだよ」

「へえ〜そうなんだ」

「結構ならんでるね」

「大丈夫！」

「何が？」

「フリーパス買ったら電波変換すれば言いしさ」

「あ〜なるほど！流石だね、ミソラちゃん」

そんなことを言ってパスを買い、中に入った

「最初どこいく？ミソラちゃん」

「え〜っと・・・ジェットコースター！！」

「!?!」

「いこつ！スバル君」

「アイタタタタ・・・急におなが・・・」

「もう、そんなこと行ってないで行くよ！」

「僕、白状すると絶対系嫌いなんだ」

「知ってるよ？だって親友フラザーじゃん！」

「そ……そっか……」

「大丈夫！いざって時は私がいるから！」

「わ……わかった……」

そしてスバルは渋々了承したのだった

「ほら！スバル君！次私達の番だよ？」

「おい、スバル顔が青いぞ？大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

『（あゝあ、あいつ完全にフラグだな、こりゃ）』

そしてついにコースターに座り、安全バーが降りた

- - ガラガラガラガラ - -

- - ガラガラ……

「（く……くる……！）」

「スバル君、目、あけてみなよ」

そうするとコースターは、坂を一気に下った

「あれ？全然怖くない、むしろ楽しいや！」

「でしょ？目を閉じてるから怖かったんだよ」

「うん、そうだね！」

そしてスバル達は遊園地をたのしんで・・・  
気がつけばもう5時だった

「あゝ楽しかった！」

「ホントだね！」

2人の考えている事は一緒だった

「最後に観覧車いこ？スバル君」

「丁度僕も行きたかったんだ」

「そうなの？じゃあいこつか！」

二人が観覧車に着くと最後のペアだった

2人とも電波変換できるため、すぐに帰ることができるから長く残  
っているのだ

人が居ないためスムーズに入ることができた

しかし中に入るとスバルとミソラは顔が真っ赤だった

「／＼／＼ねえ・・・ミノラちゃん・・・／＼／＼」

「／＼／＼なに？スバル君・・・／＼／＼」

「／＼／＼あのさ、私も言いたいことあるんだけどさ・・・／＼／＼」

「／＼／＼僕と（私と）付き合ってください！！／＼／＼」

「／＼／＼ふえ？」

「じゃあ改めて僕から言うね・・・」

「ぼっ僕と付き合ってください！」

「私でよかったらお願いします！」

そして観覧車を降りた後2人は黙って家まで帰った



「仕方ないよ、昨日夜遅くまでギターの練習してたんだもん」

そう、あの日から（第7話参照）スバルは毎日ギターの練習をしているのである。

『そ……そうなのか？』

「うん……ごめんねロック君」

『ケツ！まあいいとりあえず起こす方法を……』いい事思いついた！「お？なんかあるのか？』

「うん！だからこれから私がスバル君を起こすね」

『おおそれは助かるぜ！ありがてえ！』

そういうとウォーロックはウィザードオフした

「さあてー！」

というとスバルの鼻をつまんでキスをした

「……ん！？んんんん！？んんんんんん！！！」

「ゲホッゲホッ……ミ、ミソラちゃん朝からなにをするの！？？」

「なにをするの！？……じゃなくて今日はWAXAに行くんでしょ  
！」

「あ……そうだったごめんね？ミソラちゃん」

「それでよろしい！」

~~~~~

朝ごはんを食べ終えたスバル達はウェーブライナーをつかってヨイリー博士の元をたずねていた

「あら、スバルちゃんにミソラちゃんどうしたの？」

「ヨイリー博士！このPGMを見てほしいんです」

「ん？このPGMは・・・どこで手に入れたの？スバルちゃん」

「手に入れたんじゃないやなくて作ったんです。でもロックの残留電波だけじゃどうしても足りなくて・・・それでこの前偶然シノビのオーパーツがPGMと融合したんです・・・それで」

「それを見てほしい・・・と、わかったわ、今調べるからしばらくまってねスバルちゃん」

「はい、ヨイリー博士「お？スバルじゃんか？」あ、暁さん！もう大丈夫なんですか？」

「おう！見てのとおり大丈夫だ」

そう言い終わるとポケットからつまみ棒を取り出した

「サクサクサクんでスバルサクサクサクお前サクサクミソラとサクサク付き合ってサクサクサクんのか？サクサクサク」

「!?!?なんでその情報がそんなところまで!?!?」

「あ、冗談で聞いたんだけどホントに付き合ってるとはなサクサクサク」

『……シドウ、話しながら食べるのはやめましょう』

『あ!お前はアシッド!!勝負だ!!表に出やがれ!』

『うっさいわよKY星人!バトルカード!ヘビードーン!』

ドオオン!!

『テメツ!なにすんだよハー』バトルカード!ジャイアントアックス!
ス!』

『さあ……おとなしくウィザードオフなさい……クスクス』

『ひゃっ!ひゃい!!!』

緊張しすぎてウォーロックは舌を嚙んでいた

そしていそいそとウィザードオフした

それにならないアシッド、ハーブもウィザードオフした

「んで話をもどすとお前ら付き合ってるのか?」

「え?別に付き合ってたな」付き合ってます!」「ちよ、まってミノソラちゃん!この人にばらすととんでもない ことに……」「へえ!お前らそついう関係だったのかあ」

3人はつかの間の休息をとっていた

第16話 WAXAの作戦とオーパーツの在処(前書き)

現在PSPの投稿です
時間があゝ

第16話 WAXAの作戦とオーパーツの在処

「スバルちゃん！解析結果がでたわ！」

「ホントですか？」

「ええ、でもスバルちゃんにはある物を取ってきて欲しいのよ」

「それも明後日までにね」

「え？でも明日は学校があるんですけど」

「ああ、その事なら心配しなくていいわ、WAXA権限で休みにしておくから」

「ちょ、ヨイリー博士、それ権力乱用・・・」

「・・・そう、これはまさしく権力乱用である」

「そんな事より取ってきて欲しい物って何ですか？」

「それはね・・・」

「それは・・・？」

「オーパーツよ」

『「オーパーツ!?!」』

『おい！バアさんどういう事だ！？』

「オーパーツには己の意志があるのよ、二人とも経験があるハズよ」
二人は納得した

「じゃあオーパーツの場所を示す地図を後でハンターに送るから準備ができたなら此処へ戻ってきてちょうだい」

『「はい（おう）！」』

ミソラはただ指令室を去るスバルの背中を見ているだけだった

「もっと・・・強くなりたい」

『ミソラ・・・』

ハープは名前を呼んであげることしかできなかった

「なら、俺が稽古をつけてやるうか？」

後ろを向いたら居たのは暁だった

第17話 ちりぢりシドウ！？（前書き）

もうそろそろオリキャラ出そうと思うんで、

もし良ければ名前くださいm) | | (m

今後ともこのふがいない作者をよろしくお願いします。

第17話 ちりぢりシドウ！？

「なら俺が稽古をつけてやるうか？」

後ろを向くとそこには暁が居た

「あつ暁さん！？体は大丈夫なんですか？」

「おう！電波変換しても全然平気だ！」

「……………」

「アシッド、本当？」

「ちょ！？多少は俺のこと信用しろよ！！」

「……………で、本当？」

「（まさかのスルースキル…………）」

『ハイ、シドウの言った事はホントウです』

『一回ちりぢりシドウになった事により、長時間の電波変換にも耐えられるようになったのです』

「おいアシッド「ちりぢりシドウ」はいくらなんでもひどいだろ！」

『ヒトのことを「ちりぢり委員長」…………と呼んでいたアナタが言えるセリフですか？』

正論を返され固まってしまった暁

「あのぁ・・・つまり特訓してくれるって意味ですか？」

「おう！でも今日は仕事があるから明日からな！」

「ハイ！」

そう言っ指令室を出ていったミソヲを見送っていた

~~~~~

〈WAXA・メインコンピュータールーム〉

「博士・・・完成しそうですか？」

暁が訪ねた

「ええ、あと一日あればなんとかなるわ・・・今回は未来の力を借りやきやいけない」

## 第18話 世界一災難な英雄

WAXA出たスバルとミソラは帰路についた。

そして家の前に着くと人だかりが出来ていたが気にせず家に入ろうとした……が

「星河スバルさんですか？」

「え？あ、はい」

「スバル君、この人達誰？」

ミソラが聞いた

「さあ、初めて見る人達だけ「あなたは本当にロックマンですか！  
！」！？」

何故かスバルの正体がロックマンという事がバレていた

「そもそも何でミソラちゃんと一緒にいるんですか？」

「え、え〜つと……それは……」

――ドオオオン！！――

「な、なんだ！？」

報道陣の一人が叫んだ

『スバル！！早く行くぞ！！』

ウォーロックが叫んだ

「マスコミの人達が居るけどしかたないね・・・」

「行くよ！ロック！」

『おう！』

「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！！」

そしてスバルはとうとうカメラに抑えられてしまった。

今まで何度か人前で電波変換していたため、マスコミからは「おおっ」という声が上がった

そこにいたのは大量のメットリオだった

「何でこんなに！？」

『ゴチャゴチャ考えても仕方ねえ！行くぞスバル！』

そしてスバルはウィルスの群に飛び込んだ

## 第19話 ウィルスパニック!?

「バトルカード！プレデーション！！ワイドソード」

スバルは広範囲に効果を及ぼすカードをセレクトし、ウィルスを消去していった

「ッ！なかなか数が減らない！」

スバルはど次々と出現するウィルスに悪戦苦闘していた

「……助けにきたぜ（よ）！ロックマン！！」「」「」

「ハープ・ノート、オックス・ファイア、ジャック・コーヴァスに  
ジェミニ・スパーク！！」

『……』  
『どついう事だ！？コーヴァスとジェミニは俺達が消去したはずだ  
……』

「説明は後だ！ウォーロック、今はウィルスを倒すぜ！」

スバルはうなずき、ウォーロックは渋々了承した

「わかった、みんな！いこう！」

「……」  
「おう（うん）……」

そういうと五人は各々戦闘を開始した

「はあああ！ロックバスター！」

「行つくよ〜！ショックノート！」

「一気に行くぜ！ペイン・ヘル・フレイム！」

『「ジエミニ・サンダー！！！」』

「ブロロロ！オックス・フレイム！」

今の一斉攻撃でウィルス達はほぼ<sup>デリート</sup>消去された

『なかなかやるな！人間！』

「誰だ！お前は！」

ロックマンが叫んだ

『我の名はドーラ、炎を司る者だ』

第20話 スペシャルストーリーver2 (前書き)

今回の話は物語本編に関わります



「ありがとう！お母さん！」

『ミソラも着物を貰ったし、スバル君もギター貰ったからその服装をあわせたら？』

「あ！いいね、それ！」

ということでは半ば強制的に曲をあわせることになった  
そして数十分後・・・

「じゃあ・・・行くよ？」

「うん」

二人は曲を引いた。そして某女性組によってその様子が録画されミソラがマネージャーに紹介したのは言うまでもない・・・

## 第21話 守る力

『我の名はドーラ、炎を司る者だ』

「ドーラ！お前の目的は何だ！」

そう聞くとドーラは一瞬でロックマンの後ろにまわった

『ロックマン、貴公の抹殺……』

「!?!?」

「スバル君に触らないで！マシンガンストリング！」

『貴公が私の相手をするのか……よかるっ』

『獄炎の（フレイム）剣！』

そう叫ぶや否やドーラの炎が剣（剣）となった

『行くぞ……』

ハープ・ノートは一瞬ドーラを見失ったかと思うと次の瞬間目の前で剣を構えていた

「嘘……!?!?」

この速度に誰も反応出来なかった、ただ一人を除いては。

――ザシュツ！――

ドーラの剣が”流星”を捕らえた。ドーラは剣を引き抜くと炎に戻した。

スバルはミソラのほうを向くにつこり笑ってまえのめりに倒れた

「ス……スバル君！！」

『目的は成し遂げた。だが貴様等も厄介だ……抹殺しよう』

「構えろ！来るぞ！」

反応したのはジャックだった。だがその時既にドーラは居なかった。スバルとミソラの心が輝いた……「大切な人を守りたい」と

~~~~~

「あれ、僕、死んじゃったのかな？」

第22話 200年前の力(前書き)

エグゼがでたりでなかったり・・・

第22話 200年前の力

「あれ、僕、死んじゃったのかな？」

そこは一面真っ白な世界だった。ただ、スバルはこの世界に見覚えがあったのだ

「此処って、僕の世界？」

『よく気がついたね！スバル君！』

「君は……エグゼ！？」

スバルがいうエグゼとはロックマンエグゼの事である。以前200年前に行った時のスバルの恩人である

『そうだよ！スバル君、でも、こんな所で油を売っているのいい？仲間が戦っているんだよ』

「でも……僕はドーラに……」

『君のミソラちゃんを思う気持ちはそんな物かい？』

「……何でそれを！？……」

『冗談だよ！……でも、君の仲間を思う気持ちはその程度じゃないだろ？』

「そつだ！僕は行かないや！」

『まっつて、スバル君、僕の力を託すよ。もうすぐ過去から熱斗君達が過去か・・・て来る。それま・・・んだ！スバル君！』

エグゼが言い終わるとスバルの視界が白く塗りつぶされた

~~~~~

現実世界のスバルのハンターに黄色い光と赤い光が入っていった・・・  
・そして、ハンターにはこう表記されていた

トライブPGMアップデート・・・エグゼPGMダウンロード完了

### 第23話 魂の共鳴（ソウル・ユニゾン）

ジャック達はドーラに3（実質4人）対1で苦戦を強いられていた。

『貴様等の実力はそんなものか・・・弱い、この手で消し去ってくれる！』

突如ロックマンからピンク色の光が放たれた

『馬鹿な！？ロックマンは始末したはず・・・』

「ソウル・ユニゾン！」

ソウル・ユニゾンと呼ばれたその姿はカラーが青からピンクに変わり、首にはマフラー、手には青いギターが握られていた。

「ロックマン！ハープ・ソウル！！」

「ロックマン？」

ミソラはまだ涙の残る目で訪ねた

「うん！正真証明星河スバルだよ！」

「さあ、行こう！ミソラちゃん！」

「うん！」

ミソラは涙を拭いて立ち上がった

『何をごちゃごちゃ「シヨック・ノート！」』

スバルはギターの練習の甲斐あつて慣れた手付きでギターを鳴らした

「私だつて！マシンガン・ストリングー！」

マシンガンストリングには麻痺効果があるためドーラは動けなくなつてしまつた

「いくよ！ミソラちゃん！エグゼ・フォース・ピックバンEFB！！！」

「ククラシツク・シヨック・ノート！！！」

二人は演奏を始め、大量の音符がドーラに飛んでいった。そして演奏が終わるとドーラは居なかつた

第24話 新生サテラポリス遊撃体（前書き）

最近前書き書いてないなあ

あとしばらくしたらAMフォースPGMとかクリムゾンPGMだします！

では本編どうぞ！

## 第24話 新生サテラポリス遊撃体

「うつ……あれ？此処は？」

「あー！スバル君！！！」

「あれ？どうしたの？ミソラちゃ……」  
「ぶっ！？」

突然ミソラがスバルにダイブした

「だって……スバル君一週間で寝たきりだったんだよ……私、スバル君が二度と起きないって思うと……グスっ！」

普通一週間で寝たきりなら心配するなというほづがおかしい

「そうだったんだ……ゴメンねミソラちゃん」

「……うつん」

……ガラガラッ……

「入るぞスバ……出直すわ」

「まってまってまって！！暁さん！！！」

「ん？せっかくイチャイチャしてるから俺は……」

「どうせWAXAのみんなにいいふらすんでしょ？」

「あ、バレてた？」

「うん、父さんとかにミノラちゃんと付き合ってるのバラさたの曉  
さんでしょ?」

「今からWAXAのメインコンピュータールームに行くぞ」

「え?あ、はい」

突然話をそらされたのでスバルはふぬけた声が出てしまった

~~~~~

「ご苦労だったな。曉」

「はい!長官」

そこにはサテラポリス遊撃体のメンバー+クインティア、ジャック、
ツカサ、キザマロ、委員長がいた

第25話 時空を越えた来訪者（前書き）

機械の中から聞こえる声は『』とします

第25話 時空を越えた来訪者

「なんで元遊撃隊メンバー以外の方が居るんですか？」

「それは順を追って説明するわね」

「まず、ジャックちゃん、クインティアちゃん、ツカサちゃんはせめてもの罪滅ぼしに、と参加してくれたわ」

「ルナちゃんは、クラスの委員長として、だそうだわ」

この瞬間クラスメイト達は「」「」「軽！」「」「」と思っただらしい

「本当はあと3人いるんだけど後で紹介するわね」

「それはさておきウイザードの話をするわね」

「コーヴァスちゃんとヴァルゴちゃんは私が、ジェミニちゃんはインターの中で再構築されたわ。もっともジェミニちゃん的人格はヒカルちゃんだけねどもね」

「さて、あとの一人を紹介するわね」

というとおもむろにメインコンピュータのキーボードをたたき始めた。そうすると画面に男の人が写った、だが全員その顔に見覚えがあった

「」「」「スバル（僕）（君）！！！？」「」「」「」

「ええ、今から15年後の未来のスバルちゃんよ」

「『『『『『ええええ！！？？』』』』』」

『そんないちいち驚かないでよ、過去に行けるんだから未来と『スバル！』ん？今通信・・・ごふ！？』

画面の中で未来のスバルが何かに突撃され画面外に消えた

第26話 未来の夫婦

『ねえねえスバル！今何してたの？』

画面外で誰かが言った

『15年前と通信中だけど……』

『なら昔の私達が丁度付き合い始めたころだね』

『ヨイリー博士達待たしてるんだから、放してよ』

『あ、だったら私も写してよ』

『わかったから放して』

『え〜わかった……』

未来のスバル達は画面に戻ってきた。そして謎のもう一人は……

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

『あ、昔の私達だ。やつほー！昔の私！スバルとはうまくいつてるかい？』

「そっちこそどうなってるの？」

『え？こっち？こっちはね、スバルと結婚したよ！』

『ちよ、ちよつとミソラ!? 何いきなり暴露してるの? 恥ずかしいじゃん!』』

「ねえねえ、そっちの僕達、そっちの会話のせいで僕達が付き合ってるのバレたんだけど……」

「はあ、もういいわ、あなた達お似合いだし、世界の英雄と国民的アイドルだしね」

「でもスバル君も国民的アイドルになるんだよ?」

「ミソラちゃん……それってどういう意味?」

「元旦の日にギター合わせたでしょ? それでナイショで録音してたんだけど、昨日マネージャーに推薦して……」

PLLL!

第27話 過去と未来と今

「スバル君、早くでなよ」

この瞬間この場に居たほぼ全員が スバル！ファイト！ とか考えたりもしてる

「もしもし、星河です・・・」

『あ、星河スバル君？後でミソラと一緒に事務所まで来てくれないかな？じゃーねー プツンッ』

『じゃあ本題に入るよ、みんな。まず、過去のWAXAに頼まれて僕達が力を貸すことになったんだけど僕等はそっちに行けないんだ。同じ時間に同一人物が二人いるのはまずいからね・・・あ、もう時間みたいだから詳しくは僕等の息子に聞いてね。それじゃ！』

そついうと前にルナや暁が出てきた装置が光って声がした

「ちよつと！熱斗！顔近い！」

「しかたないだろ！？どうしようもないんだから！」

「おい！光！足を近づけるな！」

「あのさ・・・あなた達誰？」

「「「そつちこそ誰！」」」

という扉が開いて中から4人が出てきた

「き……君は……熱斗君!？」

「お、お前スバルか？久しぶりだな！」

「ところで熱斗君、何で200年後にいるの？」

「「「……へ?」「」」

第28話 ヨイリーのネーミングセンス(前書き)

ざりざり今日の間投稿できたあ

第28話 ヨイリーのネーミングセンス

「あなた達3人がこの時間に来たのは二つの原因があるわ」

熱斗達は現在ヨイリーからこの時代に来てしまった理由を聞いていた

「一つ目は私達が時間に干渉すぎた事、もう一つがこちらの通信環境のほづが環境がよかったためにこちらの時間に引きずり込まれてしまったこと」

「それって・・・私達はもう元の時間に帰れないってことですか？」

「いいえ、元の時間には私達が責任をもって帰してあげるわ。ただ・・・」

「」「ただ？」「」

「こつちで問題が起きてるのよ・・・その問題が・・・」

「なら俺達が解決するぜ！な、ロックマン！」

『うん。熱斗君の言うとおりだよ！この世界の人達が苦しんでるのに放っておくなんてできないよ！ね、みんな！』

「当然だ。貴様等にいわれずともやってやるさ」

「ちよつとおく何二人で盛り上がってるの？私達もやるわよ！ね口ール！」

『うん！そのわるいやつらに一泡吹かせてやりましょ！』

「3人とも・・・ありがとうね、熱斗ちゃん、炎山ちゃん、メールちゃん」

「熱斗（炎山）ちゃん!?!」

第29話 スバルの進路？（前書き）

明日（つまり今日）更新できないかもです（一応深夜更新・・・）
（一人漫才www）

第29話 スバルの進路？

熱斗達が話を聞いていたところスバルサイドでは

「君の名前は？」

ミソラが聞いた

「^{ネビ}星河宇宙です。今年で12才です」

宇宙の見た目は赤いパーカーに流星ペンダント、ミソラと同じような髪型だが色がスバル、エメラルドグリーンの瞳、ビジライザーに赤色のギターといったまさしくミソラとスバルの”子”なのだ

「宇宙君かあ〜いい名前だね」

ツカサが言う

「そつだな。・・・ところで未来の俺達は何してんだ？」

ジャックが聞いた

「え〜つと母さんと父さんがアイドルで、ゴン太さんが吉 家の店長で、キザマロさんが政治家、ルナさんはCA COMの社長秘書でツカサさんとジャックさんはカフェやっています。人気ですよ？町の女性に。あと父さんが休みの日に毎朝通ってるから+」

「あのさ、宇宙君。アイドルミソラちゃんと僕って言った？」

「うん。そりゃあもうすごい人気で父さんか母さんの出てる番組は平均視聴率30%越えは当たり前、ライブの時は五万人のチケットなら男性50%女性50%の割合だよ」

この言葉を聞いて全員（スバルと宇宙以外）が言った

「「「「「よかったね。進路が決まって」「」「」」」」

そこにヨイリー博士達が戻った

第30話 遊撃隊新メンバー

「みんなに連絡があるわ!」

ヨイリーが入ってきてそうそうにいった

「遊撃隊に新メンバーを追加するわ。三人とも、入ってきて。」

そうすると扉が開きその三人が入って来た

「光熱斗です!知ってる人も知らない人もよろしくな!」

「伊集院炎山だ。宜しくたのむ」

「桜井メールです!宜しくお願いします。」

「彼らには過去に帰るまでの間遊撃隊として「すみません!!遅れました!!!」

声の出所を見るとそこには黒髪の男の子と白い長髪の女の子がいた

「あら、遅かったわね、時差ぼけかしら?」

「まったくその通りで・・・」

「まあいいわ。二人とも、自己紹介してちょうだい。」

「神崎ソウタです!よろしく!」

「井上ルミですわ。皆さん宜しく願いいたしますわね。」

『熱斗君！この近くにフォルテの気配がする！』

「え！？でもここは200年後だ。よく気が付いたな、ロックマン」といってソウタのハンターからフォルテが出てきた

「なんでフォルテがここに！？」

「それはまた今度、それより博士、まだいたい事あるでしょ？続きどうぞ」

「おほん！まずスバルちゃん。あなたはしばらくトライブPGMの使用を禁止するわ」

第31話 PGMの欠陥

「え？博士今なんて・・・」

「今のライブPGMは欠陥だらけなのよ」

「ライブオン程度ならいいかもしれないけどくれぐれもトリプルライブはしないこと。いい？」

「あと過去から来た三人はPETを預けてくれないかしら？ナビのアップデートと端末を現代の物に変えるわ」

「・・・はい」

「それでは解散！」

~~~~~

「はあく疲れたぜ」

熱斗達はコダマタウン行きのエーブライナーに向かっていた  
なぜスバル達がないのかという・・・

「さて！僕も帰ろっか「スバル君！」は、はい！」

「スバル君はこっちでしょ？」

ミソラの指さすほうを見るとベイサイドシティ行きのエーブライ  
ナーがあった

「ギク!?!」

「さあいこつかスバル君」

「いやだああああ!僕はアイドルになんかなりたくな〜い!〜!」

ミソラはスバルを引きずって消えていった

「なあ・・・炎山、スバル、何があつたんだろうな?」

「・・・さあ?」

「熱斗達〜早くしないとおいてかれるよ!」

「げ!?!やば!」

それから数時間後、スバルとミソラは帰りのにウエーブライナーに乗っていた

### 第32話 敵の奇襲

「はあく合格しちゃった!どうしよう!?!」

「いいじゃん 私とテレビに出れるんだからさ」

「ミソラちゃんも知ってるでしょ?僕が目立つの嫌いな事」

「え?私とテレビ出るのいやなの?(涙目+上目遣い)」

「え?あ、嫌じゃないけど・・・」

「じゃあいいよね」

そういうとスバルに抱きつこうとしたが・・・

『その女、貴公にとって大切なものとみた!』

その声がした瞬間ウェーブライナーの天井に穴があき、ミソラが消えていた

「くっ!ミソラちゃんはどこだ!?!」

『こっちだ!』

『さあお前もこい!ロックマン!』

「行くよ!ロック!」

『おっ！』

「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！」

『来たか、ロックマン』

そういった者の腕にミソラが抱えられていた

「ミソラちゃんを返せ！」

『まあまあ、拙者の名はコウ。DN風を司る者だ』

「ミソラちゃんを返せ！」

『いいだろう、ただし・・・私にかてたらな！』

『トルネードランス！』

「ッ！？バツ、バトルカード！プレーション！バリア！」

しかしそんな物は無に等しかった

### 第33話 オーパーツの覚悟

「くそっバリアが……うあああああ!!!!」

『止めだ、ストーム・ブレイク・トルネード!!!!!!』

「僕は負けるはけには行かないんだ、トリプルライブ!!」

「!?!?スバル君!」

光が消えるとドライブ・キングがいたが少し様子がおかしかった  
目にはいつもの光がなく、ただ、こうつぶやいていた

「ワレワレノシユゾクラフツコウサセルノダ」

そついうとなんの予備動作も無しにカイザー・デルタ・ブレイカー  
を放った

『な……ぐあああああ!』

「スバル君……どうしちゃったの!?!」

だがスバルはミソラの呼びかけには答えなかった

~~~~~  
スバル精神世界

「あれ?ここは?君たちは……オーパーツ?」

『キサマノカラダハイタダイタ、アトハセイシンヲウバウノミ』

「何を……ぐっあああああ!!!!!!」

「君たちは僕の体を使って何がしたいんだい?……」

『シユヅクノフツコウ……』

「もう……君達の種族は滅んだんだ」

『ホロンデナドイナイ、コレカラフツコウサセルノダ』

「本当は君達も解ってるはずだよ、こんなことしたって種族は蘇らない」

「大事なのは復興させることじゃなくて、過去、に囚われず、今、に伝えるのが僕らの役目なんじゃないかな?」

『ナラバ……オマエガワレラニキヨウリヨクシテクレルノカ?』

「もちろんさ、それが君達の願いならね」

そしてオーパーツは口を開いた

『ナラバ、ワレラノオサニナツテクレヌカ?』

「どっぴいっこと?」

『ツマリ……オマエハニホンジンカラムージンニナリ、ワレラノヒゲキライツシヨニツタエテホシイノダ』

スバルは驚いたが決心にそれほど時間はかからなかった

「わかった。そのかわり君達も僕に力を貸して欲しい」

『ヨカロウ、ワガアルジヨ……』

そういとスバルの精神世界は光に包まれた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1142ba/>

流星のロックマン～光輝く絆～

2012年1月8日22時51分発行